

『明暗』執筆期漱石漢詩の推敲について―「詩人の時間」を体験する試みとして

佐藤 大志

一 はじめに

夏目漱石が『明暗』執筆中の午後の日課として、漢詩を作成していたことはよく知られるところであろう。久米正雄・芥川龍之介宛書簡（大正五年八月二十一日付）には、次のようにある。

僕は不相変『明暗』を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快樂、器械的、此三つをかねてゐます。存外涼しいのが何より仕合せです。夫でも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つ位です。さうして七言律です。中々出来ません。

厭になればすぐ已めるのだからいくつ出来るか分かりません。^{*1}

この「午後の日課」としての漢詩は、大正五年八月十四日から同年十一月二十日まで作り続けられ、現存する漱石の漢詩のほぼ三分の一に相当する七十八首の詩が制作されている。またこの時期の漢詩創作ノートが東北大学附属図書館に所蔵されており、漱石がどのように漢詩を創作していたのか、その推敲の跡も知ることもできる。

齋藤希史氏は、この時期の漱石の漢詩について、『明暗』において追求される名と実の問題、嘘の問題と関連させつつ、ことばによる表現とは何か、表現は何をなし得るのかという問題が内包されているこ

と、更にこの時期の詩稿に推敲の跡があることについて、表現行為の再認識としての詩作という観点から見直すことができると言う^{*2}。

稿者は、平成二十八・二十九年度の大学院授業科目「国語文化学演習Ⅴ（漢文学領域）」において、この時期の漱石の漢詩をとりあげ、その推敲過程について検討を行った。検討の結果、漱石の推敲には、平仄を整えるためや前後の対応を考慮した語句の変更といった軽微な改変も多いものの、なかには作中人物の姿やこころの動きが想像できるように表現が工夫され、推敲するなかで、もともと表現されていた事柄や思いが後退し、新たな事柄や思いが立ち上がり、或いは表現する自分自身に問いかける詩人の姿を確認することができた。この時期の漱石の漢詩創作、特に前半期のそれは、詩の創作そのものを楽しむ行為としてあつたようであり^{*3}、そのように詩の創作を楽しむ詩人の姿は、詩の推敲過程にも読みとることができる。

そこで本稿では「詩人の時間」を体験する一つの試みとして、漱石漢詩の推敲過程を推論してみたい。「詩人の時間」を体験する」とは、山元隆春・中井悠加両氏が平成二十五年度日本国語教育学会西日本集会で行ったワークショップのタイトルである。その趣旨説明によれば、学校現場において実践経験の少ない「詩の創作」に関して、詩の指導の問題以前に、「詩を創作すること」そのもののイメージを指導者が明確に持てないことに対する懸念があると指摘されている^{*4}。

漢詩を創作することは、現代の我々には縁遠い行為ではあるが、漢詩を鑑賞するうえで、書き手の側に立ち、詩を書く行為を追体験してみることは、学習者たちが当事者意識をもって、主体的に書き手と向き合うことを可能にする有効な手段となるのではないだろうか*5。

山元・中井両氏の実践を踏まえて、中学校における詩の創作を实践する浜岡恵子氏は、山元氏との共同研究において、「推論する」活動を取り入れた漢文指導を行っている。そのなかで浜岡氏は、絶句四句の承句と結句を学習者に伏せ、その両句の漢字をばらばらにして学習者に示し、起句と転句から読み取ったことをもとに、承句と結句の内容を推論して漢字を並べ替えて句を組み立てさせるといふ実践を行っている*6。漱石の推敲過程を読み解くことは、この中学校における実践に比べれば、専門的な知識も必要とはするが、「推論する」活動を取り入れた漢文指導の一つの試みとして実践が可能ではなかるうか。

本稿では、高等学校若しくは大学に於ける漢詩の学習を念頭に、『明暗』執筆期の漱石漢詩について、幾つかの例を挙げて、その推敲の過程を推論する。本稿の推論は、上記の大学院における演習において、受講生とともに検討した結果をもとに、稿者の責任でまとめたものである。それは、あくまでも一つの解に過ぎず、これをたたき台として、或いは一つのモデルとして、更なる推論がそれぞれの教室で構築されることとなれば幸いである。

漱石の漢詩ノートは、東北大学附属図書館の「漱石文庫」に「小遣帳及び漢詩ノート」として所蔵されており、同文庫のHPでその画像を閲覧することが可能である*7。この漢詩ノートを見ると、漱石はまず日付なしで漢詩を記して推敲を施し（第一次稿）、それを別の箇所に一度清書して、更に推敲を施していたようである（第二次稿）*8。本稿で引用した漢詩については、文末に漢詩ノートの第一次稿と第二

次稿の画像を掲示しているので、随時参照していただきたい。

またこの漢詩ノートをもとに、その推敲過程を推測再現した労作に、加藤二郎『『明暗』期漱石漢詩の推敲過程』（『宇都宮大学教養部研究報告』第二二号 一九八九）がある。さらに『漱石全集』巻一八（岩波書店 一九九五）の一海知義氏による漱石漢詩の訳注には、初案・訂正稿段階の句とその書き下し文が示されており、初案から定稿に至る推敲過程を推論する手助けとなる。なお、本稿で用いる漱石の漢詩の本文及び作品番号は、一海知義訳注『漱石全集』巻一八による。

二、漱石の漢詩推敲の実際

— 143 「無題」大正五年八月二十二日を例として

- 143 「無題」大正五年八月二十二日
- | | |
|-----------|------------------|
| 1 香烟一炷道心濃 | 香烟一炷 道心濃し |
| 2 趺坐何処古仏逢 | 趺坐 何れの処か古仏に逢はん |
| 3 終日無為雲出岫 | 終日 無為 雲 岫を出で |
| 4 夕陽多事鶴帰松 | 夕陽 多事 鶴 松に帰る |
| 5 寒黄点綴籬間菊 | 寒黄 点綴す 籬間の菊 |
| 6 暗碧衝開牖外峰 | 暗碧 衝開す 牖外の峰 |
| 7 欲拈胡床遺塵尾 | 胡床を拈はんと欲して 塵尾を遺れ |
| 8 上堂回首復呼童 | 堂に上り首を回らして復た童を呼ぶ |

この詩は禅僧のごとく悟りを求めて隠棲する日々の一景を写した詩であり、首聯はたち上る香の煙に悟道の心が深まり、坐禅して古仏との出会いを願う主人の心を詠む。「古仏」は過去仏。過去に悟りを開いた仏を指す。

続く頷聯はそのような主人の一日を象徴するかのような自然の運行を描く。吉川・一海両氏は、この句が陶淵明「歸去來辭」(『文選』卷四五)の「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還」(雲は無心にして以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦みて還るを知る)を踏まえると指摘する。「鶴帰松」は、中唐・雍陶「憶山寄僧」(『全唐詩』卷五一八)に「憶山長羨鶴帰松」(山を憶ひて長に鶴の松に帰るを羨む)とあり、山中に隠棲することを暗示する語。

頷聯は住居からの眺望を描く。「籬間菊」と「牖外峰」は、陶淵明「飲酒」二十首其五(『文選』卷三〇)では「雜詩二首」其二の有名な「采菊東籬下、悠然望南山」(菊を采る 東籬の下、悠然として南山を望む)を踏まえていることを考えれば、ここは外の景物に心惹かれることを言外に含むのであろう。

尾聯は胡床を払おうしたが、払子を忘れたことに気付き、童を呼ぶ主人の姿を詠む。「上堂」について、吉川・一海両氏は「庭から座敷にのぼる」ことと注す。この解釈に拠れば、尾聯は庭に出ている主人が、胡床に座って(更に)ゆつくりと眺望を楽しもうとしたところ、払子を置き忘れてきたことに気づいて…、という状況が想像される。

さて、この詩の推敲過程を示すと次のようである。なお、定稿に至る間に、前稿を推敲している箇所は□で示した。平仄と押韻は基本的に『広韻』に従い、平仄は二四不同・二六対・反法・粘法及び韻を踏まない句末の正否*9が分かるよう、各句の偶数字と句末字にのみ記した。孤平・下三連などの禁則事項への配慮*10については、該当するところのみ指摘する。

【推敲過程】

○は平声、●は仄声、◎は平声の押韻字を示す(以下、同じ)。

【草案】

1香烟一灶道心濃

【初案】

【訂正稿】

1香烟一灶道心濃

【定稿】

終日無為□對岫
道心誰識独栽松

2 結脚○何時○古仏逢
3 終日無為○雲出岫
4 重陽○多事○鶴帰松
5 暖黄○点綴○籬間菊
6 暗碧○衝開○牖外峰
7 欲払○胡床○無塵尾
8 虚堂○昼静○復呼童

2 踏坐○何時○古仏逢
3 終日無心○雲出岫
4 夕陽○多事○鶴帰松
5 寒黄○点綴○籬間菊
6 暗碧○衝開○牖外峰
7 欲払○胡床○忘塵尾
8 虚堂○静処○起呼童

2 踏坐○何処○古仏逢
3 終日無為○雲出岫
4 夕陽○多事○鶴帰松
5 寒黄○点綴○籬間菊
6 暗碧○衝開○牖外峰
7 欲払○胡床○遺塵尾
8 上堂○回首○復呼童

この詩の第一次稿(画像1参照)は、前日の詩稿の左余白に、まず第三句と第四句の二句のみ(草案)が上部に書かれており、その下に全体八句(初案)が書かれている。

まず首聯は第二句【初案】の「結脚」が【訂正稿】で「踏坐」に推敲されるのみ。【初案】の「結脚」は足を組んで座る坐禅の座り方であり、【訂正稿】の「踏坐」と同義。これは「脚」が平声で平仄が合わないため、仄声の「坐」に変えたためと考えられる。しかし、問題は【初案】で「何時」であった四字目「時」(平声)を、【定稿】では「処」(仄声)に変えていることである。この変更のため、逆に【定稿】では四字目の平仄が合わなくなっている。

漱石の漢詩は平仄を厳密に守る傾向にあり、漱石は近体詩の諸規則に精通していたようである*11。この時期の推敲も、二字目の「結脚」から「踏坐」へのように平仄を整えるための変更も多いのだが、ここでは珍しく平仄が合っていない。ただ、こと同じように、前日の八月二十一日の詩も、第一句の平仄が【初案】では合っていたにも関わらず、【定稿】では、推敲の結果、合わなくなるといふ例が見える。いまその首聯の推敲過程を示すと次の通りである。

142 「無題」大正五年八月二十一日

【初案】

- 1 未知。行脚。未知。経。未だ行脚を知らず。未だ経を知らず。
 2 漫走。東西。似。転萍。漫りに東西に走りて。転萍に似る。

【定稿】

- 1 未^レ作^ル文章。不^レ論^ス経。未だ文章を作らず。経を論ぜず。
 2 漫走。東西。似^レ泛萍。漫りに東西に走りて。泛萍に似る。

この詩の【初案】では第一句は、僧侶のように「行脚」して修行することも知らず、「経」も知らない自分を言う句であったようである。

「行脚」との対応から、「経」は仏教の経典を指すと考えられる。それが推敲の結果、【定稿】では「文章」も知らず、また「経」も知らずとなり、二字目と四字目の平仄が合わなくなっている。ここで「文章」は詩文を指し、それとの対応を考えれば、「経」は仏教のみならず、儒教の経典も指すと考えられ、いまだ文学もならず思想を論ずることもない自分を言う句へと変わっている。この首聯は現在の自分が置かれた状況を述べる句であり、第二句でも「東」と「西」の間をとりとめもなく奔走する自分を描き出す。第一句の推敲は、この現在の自分をどのように描き出すかということを考えた上での推敲のようであり、そのために平仄が合わなくなってしまったものと考えられる。

本詩の第二句の「何時」から「何処」への改変は、漢詩ノートに推敲の跡はなく（画像2参照）、清書時の誤写の可能性もあるのだが、或いはここも敢えて平仄を犯しても、時間よりも場所を問うことで、何事かを表現しようとしたのかもしれない。

続く領聯は、【草案】から【初案】への改変によって、第四句の内容が大きく変えられており、第三句もそれと呼応するように推敲が行われているようである。いま推敲の過程を推論しやすくするため、領聯の本文と書き下し文を示すと次のようである。

【草案】

- 3 終日無為□对岫。終日 無為 □ 岫に対し
 4 道心誰識独栽松。道心 誰か識らん独り松を栽うるを

【初案】

- 3 終日無為雲出岫。終日 無為 雲 岫を出で
 4 重陽多事鶴帰松。重陽 多事 鶴 松に帰る

【訂正稿】

- 3 終日無心雲出岫。終日 無心 雲 岫を出で
 4 夕陽多事鶴帰松。夕陽 多事 鶴 松に帰る

【定稿】

- 3 終日無為雲出岫。終日 無為 雲 岫を出で
 4 夕陽多事鶴帰松。夕陽 多事 鶴 松に帰る

第三句の【草案】「終日無為□对岫」の五字目を一海氏は「雲」とする。「雲」であれば、【草案】は雲が岫に向い合うさまを描く句となるが、【初案】では陶淵明「歸去來辭」に近づき、雲が岫から出て行くさまを描く句と変わっている。また「無為」は、第二次稿（画像2参照）では「為」の右傍に「心」と記されており、それが消されて、改めて「為」が左傍に記されて、【定稿】となっている。

第四句の【草案】「道心誰識独栽松」は『臨濟録』『行録』に見える「臨濟栽松」の故事に基づく。「臨濟栽松」の故事は、師の黄檗に深山に数本の松を植える理由を尋ねられた臨濟が、「一つには山門の与に境地をなし、二つには後人の与に標榜と作さん」と答えたというものであり*12、「独栽松」がこの「臨濟栽松」の故事を踏まえるならば、【初案】は冒頭二句で修行する人物が、後人の為に標榜を立てようと、人知れず松を栽えようとしていることを詠んだものと解釈できる。

この【草案】が、【初案】では「重陽多事鶴帰松」となり、座禅を組んで修行する主人の思いを詠む句から、重陽の日の俗事を避けるよ

うに、山に帰る鶴の姿を描く句へと大きく変わっている。「多事」は、ここでは俗事の多いこと。【草案】では、修行する主人の姿や思いが直接的に表現されていたが、【初案】では脱俗の思いを象徴する雲や鶴の姿を描くことで、間接的に主人の思いを表現する句となっている。

また【草案】では「臨済栽松」の故事を踏まえて、人々の為に標榜を立てようとする主人の思いが表明されていたが、推敲の結果、【初案】では、むしろそのような世俗への思いから逃れて隠遁を志向する思いが表明され、詩全体も自然を愛し隠遁を志向する内容となっている。なお「臨済栽松」の故事を踏まえた第四句【草案】の着想は、翌日の詩の第四句に用いられ、ここでは自然を愛する思いと人々の為に悟りを求める思いが頷聯で対置されている*13。

頸聯は、第五句の【初案】「暖黄」が、【定稿】では「寒黄」へと変わっており、これは第六句の「暗碧」と対応させたものである。

尾聯は、【初案】から【定稿】にかけての推敲の跡に、作中人物の姿や心の動きがより想像しやすくなるような配慮がうかがえる。ここも推論をしやすくするために、尾聯の本文と書き下し文を示しておく。

【初案】

7 欲払胡床無塵尾 胡床を払はんと欲して 塵尾無く

8 虚堂昼静復呼童 虚堂 昼静かにして復た童を呼ぶ

【訂正稿】

7 欲払胡床忘塵尾 胡床を払はんと欲して 塵尾を忘れ

8 虚堂静処起呼童 虚堂 静かなる処 起ちて童を呼ぶ

【定稿】

7 欲払胡床遺塵尾 胡床を払はんと欲して 塵尾を遺れ

8 上堂回首呼童 堂に上り首を回らして復た童を呼ぶ

まず第七句の【初案】「無塵尾」の「無」が、【訂正稿】で「忘」、

【定稿】で「遺」となる。些細な変更ではあるが、【初案】の「無」は「塵尾」の有無を示すだけに過ぎなかったものが、【訂正稿】と【定稿】では主体が「忘／遺」れてきたとすることで、このときの主体の心の動きを想像できる表現となっている。なお「無」「遺」は平声、「忘」は仄声で、「忘塵尾」⇨下三連となってしまうため、ほぼ意味の同じ「遺塵尾」としたものと考えられる。

第八句は、【初案】では「虚堂昼静復呼童」であったが、【訂正稿】では「昼静復」が「静処起」となる。【訂正稿】では「昼」という時の設定が無くなり、また「起」からは、虚堂に座禅していた主人が立ち上がる姿が想像できる。これが【定稿】では上四字が「上堂回首」と改められ、「起」は「復」に戻る。

先述の如く、「上堂」を吉川・一海氏は「(庭から)座敷にのぼる。」と注すが、この解釈の背景には、この詩の頸聯が陶淵明「飲酒」二十首其五の「采菊東籬下、悠然望南山」(菊を采る 東籬の下、悠然として 南山を望む)を踏まえていることが意識されているのであろう。そのように考えれば、坐禅をしていた主人が、頸聯のような屋外の風景に惹かれて庭に出て、更にゆったりと風景を楽しもうと「胡床」(安楽椅子)に坐ろうとしたものの、払子を置き忘れてきたことに気がついて、庭から堂に上って童子を呼ぶ、そのような屋内から屋外へ、そして屋外から屋内へという、一連の主人の動きが想像できる。

いま、尾聯の【初案】から【定稿】までの推敲の過程を推論すれば、【初案】の尾聯「欲払胡床無塵尾、虚堂昼静復呼童」は、「虚堂」で「結脚」していた主人が、「胡床」(安楽椅子)に坐ろうとして「塵尾」が「無」いことに気付いたという状況を描出していた。それを【訂正稿】の「欲払胡床忘塵尾、虚堂静処起呼童」では、「塵尾」を「忘」れたことに気付いた主人が(「結脚(趺坐)」から?)「起」ち上がっ

て…と、主人の心と姿に動きが加わり、更に【定稿】では、(頸聯の風景に惹かれて?)庭に出ていた主人が「塵尾」を「遺」れてきたことに気付いて、(庭から)「堂に上」って…となり、堂から庭へ、そして庭から堂へと主人の動きに幅が生まれ、さらにその動きに伴う主人の心の動きにも解釈の幅が生まれている。

このように、漱石の推敲は平仄を整えたり、前後の対応に配慮した軽微な変更だけではなく、推敲の結果、詩中に読み込まれる思いが変化し、また人物の姿や心の動きをより豊かに想像できるような表現となっており、そこに漱石の表現行為の再認識としての詩作の一端がうかがえそうである。

そこで、次に本詩の頷聯と同じように、推敲の結果、詩中に読み込まれる思いが当初のものとは変わってしまう例として、147「無題」大正五年八月二十九日を取りあげ、その推敲の過程を推論してみたい。

三、詩作の思いから帰隱の思いへ

147 「無題」大正五年八月二十九日

- 147 「無題」大正五年八月二十九日
- 1 不愛帝城車馬喧 愛せず 帝城 車馬の喧しきをかまひす
 - 2 故山帰臥掩柴門 故山に帰臥して 柴門を掩はんおほはん
 - 3 紅桃碧水春雲寺 紅桃 碧水 春雲の寺
 - 4 暖日和風野靄村 暖日 和風 野靄の村
 - 5 人到渡頭垂柳尽 人 渡頭に到りて 垂柳尽き
 - 6 鳥來樹杪落花繁 鳥 樹杪に來たりて 落花繁ししげ
 - 7 前塘昨夜蕭蕭雨 前塘 昨夜 蕭蕭の雨
 - 8 促得細鱗入小園 細鱗を促し得て 小園に入らしむうなが

首聯は陶淵明の「飲酒二十首」其五(既引)の冒頭句「結廬在人境、而無車馬喧結廬」(廬を結びて人境に在り、而も車馬の喧しき無し)を踏まえた表現を用い、都会の喧噪を避けて故郷に帰って隱遁せんとする心を詠む。

頷聯では、穏やかな春の景が広がる山村の姿を描き出し、頸聯では、別れの場でもある渡し場のしだれ柳と鳥が枝の上に止まるたびに花びらが散る様を描く。「垂楊尽」は、中唐・孟郊「折楊柳」(『全唐詩』卷三七三)に「楊柳多短枝、短枝多別離。贈遠屢攀折、柔條安得垂」(楊柳 短枝多く、短枝 別離多し。遠きに贈らんと屢ば攀折せば、柔條 安んぞ垂るるを得ん)とあるように、別れの場で旅立つ相手に柳の枝を折って贈ろうとすることが多いため、しだれ柳の枝も尽きてしまっていることを言うのであろう。

尾聯は、昨夜のもの寂しい雨で水流が増し、庭園の内部に流れ込むさまを詠む。「細鱗」は、『草枕』にも「海は足の下に光る。遮ぎる雲の一片さえ持たぬ春の日影は、普ねく水の上を照らして、いつの間にかほとぼりは波の底まで浸み渡ったと思わるるほど暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平らに流したる所々に、しろかねの細鱗を畳んで濃やかに動いている。」とあり、春の光をうけて魚の鱗のように輝く海面を形容する語として用いられている。この尾聯も同じように、昨夜の雨水が泉流となって庭に流れ入り、春の光をうけて魚の鱗のようには輝くさまを言うのではなからうか。菅茶山などと交友のあった江戸時代後期の牧野黙庵「春窓対雨」(『松村遺稿』)に「昨來微雨灑園林、促得春光次第深」(昨來の微雨 園林を灑ひ、促し得たり 春光の次第に深きを)とあり、春の細雨が庭の木々にそそいで、春の景色を深めてゆく様を詠む句も見える。

さて、この詩の推敲過程は次のようである。

【初案】	【訂正稿1】	【訂正稿2】	【定稿】
1 畢竟詩人老華門	好住詩郷掩華門	迂闊口逃世故煩	1 不愛帝城車馬喧
2 只令青帝復回轅	紅桃碧水春雲寺	詩郷高臥掩柴門	2 故山歸臥掩柴門
3 桃花碧水春雲寺	鳥来樹梢落花繁		3 紅桃碧水春雲寺
4 暖日和風野靄村			4 暖日和風野靄村
5 人到渡頭垂柳尽			5 人到渡頭垂柳尽
6 鳥来樹梢落花繁			6 鳥来樹梢落花繁
7 前塘昨夜蕭蕭雨			7 前塘昨夜蕭蕭雨
8 促得細鱗入小園			8 促得細鱗入小園

この詩は首聯がよく推敲されており、その推敲の過程で、詩中の思いや詩全体の方向性が当初のものとは変わってしまった。第三句と第六句の推敲は軽微な変更であるので、先に考えておきたい。

第三句は、【初案】の「桃花」が、【訂正稿1】では「紅桃」と「碧」わる。「桃花」でも平仄は問題なく、ここは一句中の「紅」と「碧」が色彩対となるように変えたものであろう。一句中で「紅」と「碧」とを句中対とする唐詩の例には、沈佺期「上巳日祓禊渭濱应制」(『全唐詩』卷一二五)に「紅桃碧柳禊堂春」(紅桃碧柳 禊堂の春)とある。また漱石の例では180「無題」大正五年十月一日に「碧空有影映紅桃」(碧空 影有りて 紅桃に映ず)とあり、また206「無題」大正五年十一月十三日には「三竿旭日紅桃峽、一丈珊瑚碧海春」(三竿の旭日 紅桃の峽、一丈の珊瑚 碧海の春)と対句で用いる。

また第六句は【初案】では「樹梢」であったのが、「樹杪」に訂正されている。「梢」と「杪」は同義であり、ここは平仄を整えるための変更と考えられる。

では、首聯の推敲過程について、順を追って推論してみたい。

【初案】

1 畢竟詩人老華門 畢竟 詩人は華門に老ゆ

2 只令青帝復回轅 只だ青帝をして復た轅を回らさしめん

【初案】は、詩人が質素な暮らしの中で老いてゆき、春の神にふたたび踵を繞らせて春を訪れさせること願うばかりという意だったようである。頷聯が春の景物を詠むのも、この首聯を承けてのものと考えられる。「華門」はいばらで作られた粗末な門。136「無題」大正五年八月十五日にも「華門不杜貧如道、茅屋偶空交似雲」(華門 杜ざさず 貧しきは道なるが如く、茅屋 偶空しく 交りは雲に似たり)とあり、仲間から離れて一人貧しく暮らす自宅を指す語として見える。

「青帝」は春の神。春の景物が作詩への思いを引き起こすことは、この詩の翌日149「無題」大正五年八月三十日の首聯に「詩思杳在野橋東、景物多橫淡靄中」(詩思杳かに在り 野橋の東、景物 多く横たはる 淡靄の中)とある。

漢詩ノート(第一次稿)では、この首聯の下に【訂正稿2】と【定稿】が併記されており、左隅に【訂正稿1】の「好住詩郷掩華門」*14と【訂正稿2】の一部(「世故煩」)が記されている(画像3参照)。

【訂正稿1】

1 好住詩郷掩華門 好んで詩郷に住みて華門を掩ふ

2 只令青帝復回轅 只だ青帝をして復た轅を回らさしめん

【初案】の第一句は、詩人が質素な暮らしの中で老いてゆくことを述べていたのに対して、【訂正稿1】は「老」いの問題が後退し、好んで「詩郷」に住み、世俗との関係を絶って暮らすことを言う。「好住」は、唐詩では、旅に出る人が、見送る人(或いは物)に対していう挨拶の言葉で、「お元気で、ごきげんよう」の意の口語表現*15だが、ここでは自ら好んで住むことを言う。

「詩郷」は、詩の世界。中国の古い詩文には用例を見ない語。漱石にもこれ以外に用例は見えない。「掩葦門」は門を閉ざして世俗との関係を絶つこと。陶淵明「癸卯歲始春懷古田舍詩二首」其二の「長吟掩柴門」（長吟して柴門を掩ふ）とある。

【訂正稿2】

1 迂闊□逃世故煩

迂闊にして □世故の煩はしきを逃れ

2 詩郷高臥掩柴門

詩郷に高臥して 柴門を掩ふ

【訂正稿2】は、【訂正稿1】の「詩郷」と「掩葦門」（↓「掩柴門」）が第二句に移り、第一句には新たな句が加えられている。【訂正稿1】の第一句の内容を二句に敷衍しようとしたようであり、春の再来を願う思いを述べた【初案】第二句「只令青帝復回轅」の意が失われている。その結果、第一句では世事に疎く世間の煩わしさから逃れたこと、第二句では、詩郷に安らかに臥してひっそりと暮らすことを言う。「迂闊」は「迂遠」に同じ。「世故」は世の中の事。世渡り。「柴門」は「葦門」と同義であり、ここは平仄を合わせるために「葦」を「柴」に改めたか。結果として、先に掲げた陶淵明「癸卯歲始春懷古田舍詩二首」其二と同じ表現となっている。なお、第一句の三字目について、一海氏はここを「始」ではないかと指摘する。

【定稿】

1 不愛帝城車馬喧

愛せず 帝城 車馬の喧かまひすしきを

2 故山歸臥掩柴門

故山に歸臥して 柴門を掩おほはん

【定稿】は先述の陶淵明「飲酒二十首」其五の冒頭句「結廬在人境、而無車馬喧結廬」を踏まえた表現となる。「掩柴門」も陶淵明の詩句と重なる表現であり、全体として陶淵明の帰隱の思いを髣髴とさせる内容となっている。その一方で、「詩郷」の語が消えて、【初案】から通底していた詩の世界への思いが失われている。

以上のように、この詩の首聯は、【初案】では、質素な隱棲生活のなかで春の到来を願う老詩人の心を詠んでいたが、【訂正稿1・2】を経て、世事に疎いが故に詩の世界に安住して隱遁生活を送るようになった事情を述べる句へと変わり、【定稿】では更に詩の世界への思いが消えて、より陶淵明の文学に近い帰隱の思いを詠む句へと変わっている。そして、その結果として、領聯以下の春の景物は、【初案】では詩人の詩情を駆り立てる景物であったものが、【定稿】では帰隱の思いを駆り立てる景物だと読者に理解されるようになっていく*16。

本詩の前後の詩においても、144「無題」大正五年八月二十三日には「春城日日東風好、欲賦歸來未買田」（春城 日日 東風好く、歸來を賦せんと欲して未だ田を買はず）と、春の景物に帰隱の思いを駆り立てられる詩がある一方、本詩の翌日には先に引いた149「無題」大正五年八月三十日に「詩思杳在野橋東、景物多橫淡靄中」とあり、春の景物に詩情を駆り立てられる詩もある。本詩の首聯の推敲は、春の景物をめぐるこのような書き手の思いが、背後にあつてのものである。そして、次の146「無題」大正五年八月二十八日は、詩句を推敲していく過程で、表現する内容が変わるだけでなく、そのように表現する自分自身に問いかける詩人の姿を見ることができている。

四、表現する自己に問いかける詩人

146 「無題」大正五年八月二十八日

- 146 「無題」大正五年八月二十八日
1 何須漫說布衣尊 何ぞ須もちひん 漫みだりに布衣の尊きを説くを
2 數卷好書吾道存 數卷の好書 吾が道存す
3 陰尺始開芳草戸 陰尺きて 始めて開く 芳草の戸

- 4 春来独杜落花門 春来たりて 独り杜ざす 落花の門
 5 蕭条古仏風流寺 蕭条たり 古仏 風流の寺
 6 寂寞先生日涉園 寂寞たり 先生 日涉の園
 7 村巷路深無過客 村巷 路深くして 過客無く
 8 一庭修竹掩南軒 一庭の修竹 南軒を掩ふ

この詩は訪れる者も無い街巷で、ひっそりと暮らす住居とその生活の快適さを描く。首聯は、無位無官の偉さを語ることはないという問いかけから始まり、数巻の書物に自らの進むべき道は示されることを言う。「布衣」は庶民。無位無官の人。頷聯は、冬が終わって周囲の門戸が開かれても、この家の門だけは独り閉ざされたままであることを言う。「陰尽」は冬の陰気が尽きる。頸聯では、頷聯が住居の様子を描かれていたのに対して、その周囲の環境が描かれる。ひっそりとした古びた風雅な寺、主人が日々散歩する静かな庭園は、都会の喧噪を離れた鄙びた土地柄を感じさせる。そして尾聯は、誰も訪れることのない路地裏に在る住居の快適な環境を詠んで結ばれている。

この詩の推敲過程は次のようである。

1 数竿栽竹愛南軒	【初案】	【訂正稿1】	【訂正稿2】	【訂正稿3】
2 数巻編書吾道存	幾竿栽竹	幾竿栽竹	幾竿栽竹	幾竿栽竹
3 老去誰開初月戸	疎竹	疎竹	疎竹	疎竹
4 春来独杜落花門	疎竹	疎竹	疎竹	疎竹
5 非関弟子風流酒	疎竹	疎竹	疎竹	疎竹
6 不掃先生日涉園	疎竹	疎竹	疎竹	疎竹
7 村巷路深無客訪	疎竹	疎竹	疎竹	疎竹
8 誰能□□再回轅	疎竹	疎竹	疎竹	疎竹

※第一句から移動
 幾竿栽竹掩南軒

- 【訂正稿4】
 清閑始信布衣尊
 雁去誰開初月戸

- 【訂正稿5】
 何須漫說布衣尊
 陰尽始開芳草戸
 只憐古仏風流寺
 一庭修竹掩南軒

- 【定稿】
 1 何須漫說布衣尊
 2 数巻好書吾道存
 3 陰尽始開芳草戸
 4 春来独杜落花門
 5 蕭条古仏風流寺
 6 寂寞先生日涉園
 7 村巷路深無過客
 8 一庭修竹掩南軒

この詩は第一句がよく推敲されており、特に【訂正稿2】から【訂正稿3】にかけて、本来第一句であった句が第八句へと移動している。この第一句を含む首聯の推敲過程については、後述することとし、先に頷聯、頸聯、尾聯の推敲について簡単に述べておきたい。

頷聯の第三句は、【初案】が「老去誰開初月戸」（老去りて誰か開かん 初月の戸）と、年老いた自分には春正月となつても誰も訪れる者はないという内容であった。これが【訂正稿4】の「雁去誰開初月戸」（雁去りて誰か開かん 初月の戸）では、雁が去つても誰も扉を開かないと変わり、さらに【訂正稿5】では、「陰尽始開芳草戸」と冬の陰気が尽きて春草に包まれる戸が開くとなつて、第四句の「春来独杜落花門」との対比関係がより明確となつている。

頷聯の【初案】「非関弟子風流酒、不掃先生日涉園」（関するに非ず 弟子 風流の酒、掃かず 先生 日涉の園）は、この家の主人の日頃の暮らしぶりを詠んでいたものが、第五句の【訂正稿5】「只憐古仏風流寺」（只だ憐む 古仏 風流の寺）を経て、【定稿】では「蕭条古仏風流寺」と、住居周辺の閑静な環境を示す句へと変化している。尾聯の【初案】は「村巷路深無客訪、誰能□□再回轅」（村巷 路

深くして 客の訪ふ無く、誰か能く□□再び轅を回らさん」と、村の路地裏深くには客が訪れることもなく、誰も車の轅をめぐらせて再訪するものもないことを詠んでいた。【訂正稿1】では第八句の句頭を「蕭条」（ひっそりとした）としたものの、【訂正稿3】では、住居の快適さを詠む第一句の「幾竿修竹掩南軒」をここに移し、【定稿】では「村巷路深無過客、一庭修竹掩南軒」として、誰も訪れることのない住居の心地よい環境を詠む内容へと変えている。

このような推敲を経て、詩全体としては、外部から閉ざされた孤高の生活を詠む内容だったものが、そのような孤高の思いとともに、ひっそりとした暮らしとその住居の心地よい環境も読み込まれるようになっていったようである。

このように領聯以下が推敲されていく中で、首聯はどのように移り変わってゆくのか、特に第一句について順を追って考えてみたい。まず【初案】から【訂正稿2】までは次のようである。

【初案】

1 数竿栽竹愛南軒 数竿の栽竹 南軒を愛す

【訂正稿1】

1 幾竿疎竹弘南軒 幾竿の疎竹 南軒を弘ふ

【訂正稿2】

1 幾竿修竹掩南軒 幾竿の修竹 南軒を掩ふ

【初案】は数本の竹が植えられた南軒を好ましく思うと、現在の環境に自足した状態を言うものであったようである。これを【訂正稿1】では第一句の「数竿」を「幾竿」に、「栽竹」を「疎竹」に、「愛」を「弘」に変えている。「数竿」は第二句が「数巻」であるため、同字の重なりを避けて、「幾」に変えたものか。

「栽竹」は人に植えられた竹を言うのに対して、「疎竹」はまばら

に生える竹を言う。柳宗元「贈江華長老」（『全唐詩』卷三五）に「風窓疏竹響、露井寒松滴」（風窓 疏竹の響、露井 寒松の滴）とあり、また菅原道真「秋」（『菅家文草』卷三）に「老松窓下風涼処、疎竹籬頭月落時」（老松窓下 風涼しき処、疎竹籬頭 月落つる時）とあり、周囲の閑散とした状況を示す語。「疏」は「疎」に同じ。さらに【訂正稿2】ではこれが「修竹」に改められ、竹の美しさを強調する。第二句の「編書」が、【訂正稿1】で書き手の意思をより感じさせる「好書」に変えられているのも、同趣旨の推敲であろう。

なお、「栽竹」は先の詩の「栽松」に似るが、唐以前の詩には用例が見えず、中唐以後に用いられる詩語。「疏（疎）竹」も東晋・孫統「蘭亭詩」に例が見えるものの、唐詩の用例は少ない。これに対して、「修竹」は古く前漢・枚乘「七諫・初放」に「便娟之脩竹兮、寄生乎江潭」（便娟の脩竹、江潭に寄生す）とあり、唐詩にも頻用の詩語。

「愛南軒」は【初案】では竹が植えられている南の軒を好む心を詠んでいたものを、【訂正稿1】では、「弘南軒」と美しい竹が軒を払う住居の情景となっている。そして【訂正稿2】では、「掩南軒」と竹が軒を掩う情景へと変わり、竹林に掩われてひっそりと隠棲するさまを言う句へと変わっている。

ここまでの推敲では、当初は自足した現在の状況を詠んでいたものが、第一句が住居の快適さへと変わってゆき、自分の思いを吐露する第二句との関係がやや不安定となっている。そのためか、【訂正稿3】では、これまでの第一句が第八句へと移動し、第一句は新しい句へと置きかえられる。

【訂正稿3】

1 清閑領得布衣尊

清閑 領し得たり 布衣の尊きを

【訂正稿4】

1 清閑始信 布衣尊 清閑 始めて信ず 布衣の尊きを

【訂正稿3】では、第一句に静かで暇な時を過ごし、無位無官の尊さを領解したことを言う句が新たに加えられる。「清閑」は静謐で暇な時。「領得」は領解する。さとする。更に【訂正稿4】は「領得」が「始信」に変えられている。「始信」は、謝靈運「登江中孤嶼」(『文選』卷二六)に「始信安期術、得尽養生年」(始めて信ず 安期の術の、養生の年を尽くすを得るを)とあるように、これまで信じていなかったことが信じられるようになることを言う表現。

このように【訂正稿3・4】では、第一句が【初案】の住居の快適さを言う句から、清閑な生活の中で無位無官の尊さを見いだしたことを述べる句へと変わっている。その結果、第二句の「吾道」の内実が第一句に暗示されていとも読めるようになっていく。しかし、このように推敲された第一句は、【定稿】ではその考えをたしなめるような句へと変わってしまう。

【訂正稿5】

1 何須漫説 布衣尊 何ぞ須ひん 漫りに布衣の尊きを説くを

【訂正稿5】では、上四字が「何須漫説」に変更され、無位無官の偉さをむやみに語る必要はないとたしなめる句となっている。この無位無官の偉さをむやみに語るのは、まさに【訂正稿3・4】の第一句であり、些か唐突に始まるように思える【定稿】の第一句は、推敲の跡から推論すれば、【訂正稿3・4】で無位無官の偉さを見いだしたと語った自分自身への問いかけと読める。

このように、首聯の推敲の跡をたどると、第一句はもともと住居の快適さを述べようとした句が、そのような暮らしの中で領解した思いを吐露する句へと変わり、更にそこで吐露された思いに対して、問いかける句へと移り変わっている。特に面白いのは【訂正稿3・4】か

ら【訂正稿5】への変化であり、ここでは推敲する過程で布衣の尊さを強調して表現してしまった自分自身に対して、それをたしなめるような言葉が投げかけられており、自らの発言／表現を、距離をおいて省みる詩人の姿を垣間見ることが出来る。

五、小結

吉川幸次郎氏は、『明暗』期の漱石の漢詩は、当初は「午前の小説による「俗了」を、午後は「風流」によって医しようとし」たものであったものが、「小説の執筆が進むとともに、だんだん生ぐさく人間くさくなる」*17と指摘する。現在、稿者は前半期の漢詩について、その推敲過程を検討し終えたところであり、本稿でとりあげた詩はいずれも、漱石が午後の日課として漢詩を制作しはじめて間もない頃のものである。そのためか、この時期の推敲の跡には、詩を創作することを楽しむ詩人の姿がうかがえる。

漱石にとつて、この時期の漢詩は、あらかじめ用意された事柄や思いを伝達するというよりも、ことばによって、またその表現によって、詩の世界やそこに託される思いが変わっていくこと、またその表現行為のなかで、新たな何かを発見して、更にそれを表現しようとするのと、そのような表現行為そのものを楽しむためのものであったようである。

では、後半期には、吉川氏が指摘するような変化が、その推敲過程にも現れるのだろうか。今後は後半期についても分析を進め、更にその推敲の過程について検討を重ねてゆきたい。

注

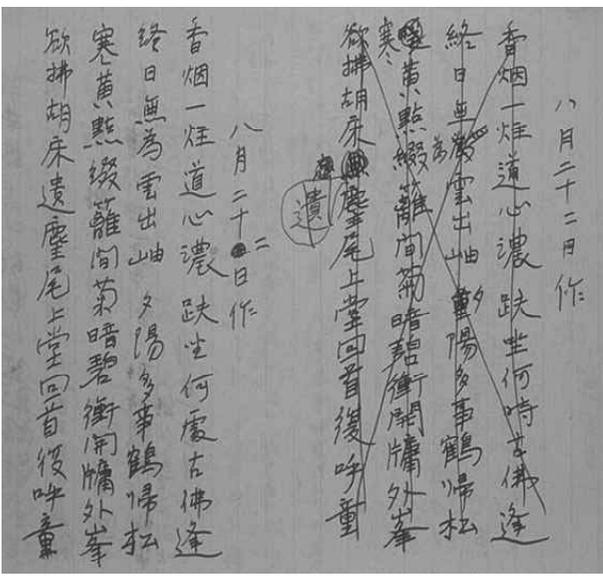
- *1 『漱石全集』巻二四（岩波書店 一九九七）五五四―五五五頁。
- *2 齋藤希史「漱石と漢詩文―修辭と批評」（山口直孝編『漢文脈の漱石』翰林書房 二〇一八所収）。
- *3 大正五年九月一日付けの久米正雄・芥川龍之介宛書簡（『漱石全集』巻二四（岩波書店 一九九七）に「時々午後七律を一首位づゝ作ります。自分では中々面白い、さうして随分得意です。出来た時は嬉しいです。高青邱が詩作をする時の自分の心理状態を描写した長い詩があります。知ってゐますか。少し誇張はありますがよく芸術家の心持をあらはしてゐます。つまりうれしいですね。」（五六六頁）とある。
- *4 山元隆春・中井悠加「詩人の時間」を体験する」（『月刊国語教育研究』二〇一三―十月号通巻四九八号 二〇一三）。
- *5 中学校における漢詩創作の近年の実践に、中山大輔「私の学習室③ 中学三年生における漢詩創作の試み」（『月刊国語教育研究』二〇一八―五月号通巻五五三号 二〇一八）がある。
- *6 浜岡恵子・山元隆春「古典を主体的に読むための指導法の研究Ⅳ―「推論する」活動をとり入れた漢文指導の実践―」（『中学教育・研究紀要』四六二（二〇一五））。
- *7 <http://www.i-repository.net/contents/hokoku/soseki/images/img26-15.pdf>
 なお、文末に掲載した漢詩ノートの画像は、東北大学附属図書館に掲載の許可をいただいたものである。ここに記して感謝申し上げます
- *8 第一次稿と第二次稿はそれぞれまとまって記されており、第二次稿は、第一次稿を全て記し終えた後に、改めて全体を清書した可能性もある。
- *9 「二四不同」は一句中の二字目と四字目の平仄を異にすること、「二六対」は一句中の二字目と六字目の平仄を同じにすること、「反法」は対となる二句において、二字目・四字目・六字目の平仄を異にすること、「粘法」は偶数句と次の聯の奇数句の二字目・四字目・六字目の平仄を同じにすること。また押韻は平声の字を用い、韻を踏まない句末の字は仄声を用いる。なお、一般の読者向けに漢詩の規則を分かり易く解説したものに、一海知義『漢詩入門』「漢詩についてのQ&A」（岩波ジュニア文庫 一九九八）、石川忠久『漢詩を作る』（大修館書店 一九九八）などがある。
- *10 「孤平」は平字が仄字に挟まれないようにすること、特に五言句の三字目、七言句の四字目は避けなければならないとされる。「下三連」は、一句の下三字に平声が三字連続、又は仄声が三字連続としないようにすること。
- *11 松尾善弘「漱石の漢詩―平仄式の検証―」（『アジアの歴史と文化』十二二〇〇八）。なお松尾氏は、漱石は平仄の均衡を回復する「救拯法」にも配慮している指摘するが、本稿ではこれを推敲の検討には加えていない。
- *12 『臨濟録』行録に「師裁松次、黄檗間、深山裏栽許多什麼。師云、一与山門作境致、二与後人作標榜」（師 松を栽うる次、黄檗間、深山の裏、許多を栽えて什麼をか作さん。師云ふ、一は山門の与に境致と作し、二は後人の与に標榜と作さん）とある。
- *13 144 「無題」大正五年八月二十三日に「無他愛竹三更韻、与衆栽松百丈禅」（他無し 竹を愛す 三更の韻、衆の与に 松を栽う 百丈の禅）とある。
- *14 加藤・一海両氏はこの句を第二句の訂正稿とする。しかし、平仄から考え、ここではこの訂正稿は第一句のものとした。
- *15 塩見邦彦『唐詩口語の研究』（中国書店 一九九五）参照。
 例えば、芳賀徹『桃源の水脈 東アジア詩画の比較文化史』（名古屋大学出版会 二〇一九）は、この詩を引いて「陶淵明「飲酒」其の五の語句を借りながら、同じく桃源の村への帰郷の願いが切にこまやかに洩らされていた」（二一八頁）と説明する。
- *17 吉川幸次郎『漱石詩注』「序」（岩波文庫 二〇〇二）十六頁。
 （広島大学）

【参考】東北大学附属図書館「漱石文庫」蔵

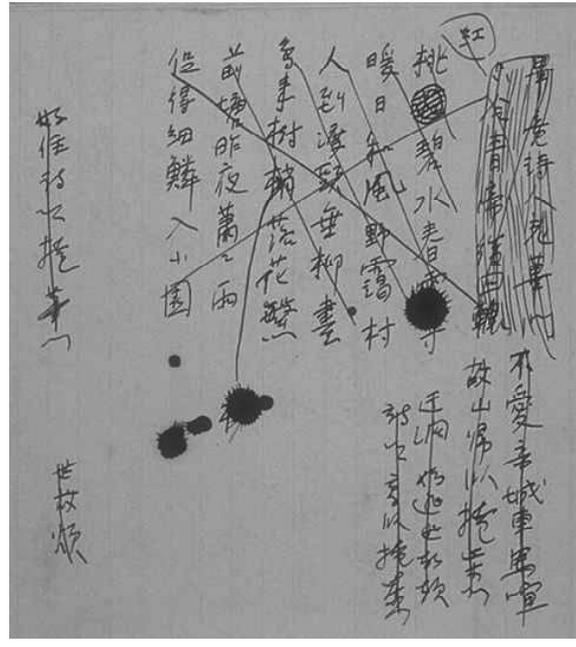
「小遣い帳及び漢詩ノート」



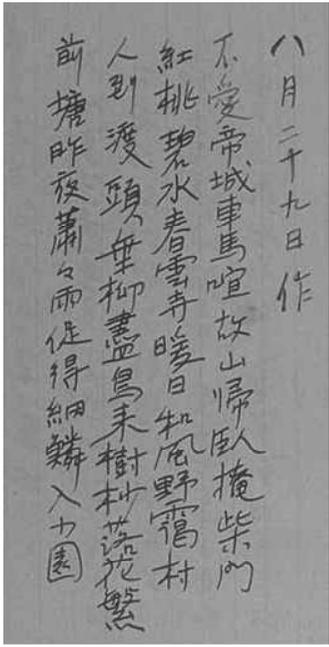
画像 1 : 143 「無題」大正五年
八月二十二日（第一次稿）



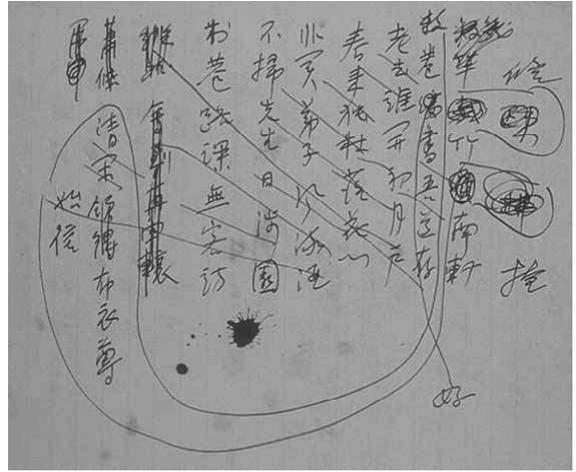
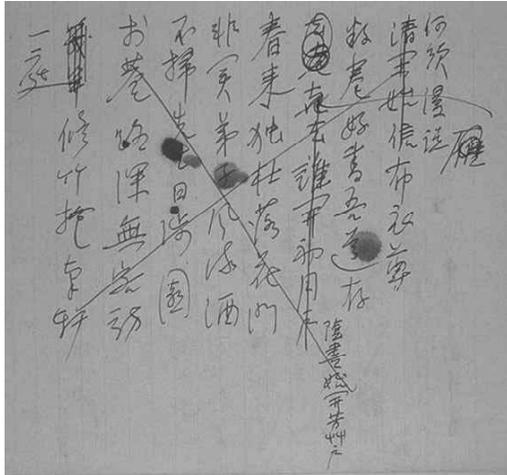
画像 2 : 143 「無題」大正五年
八月二十二日（第二次稿）



画像 3 : 147 「無題」大正五年
八月二十九日（第一次稿）

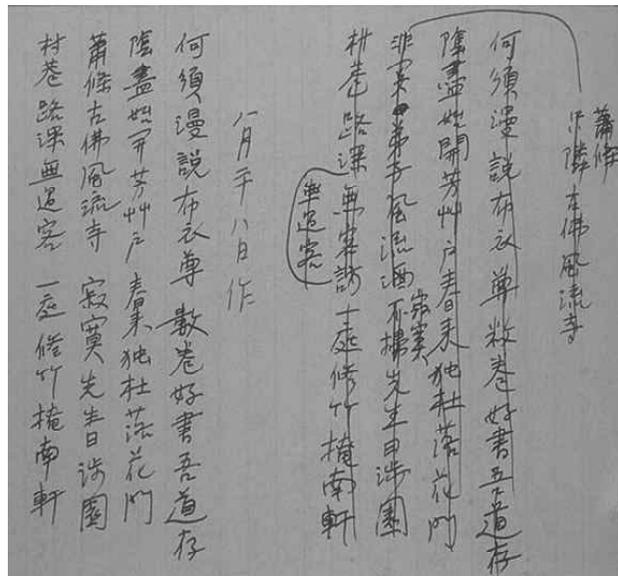


画像 4 : 147 「無題」大正五年
八月二十九日（第二次稿）



画像 5 : 146 「無題」 大正五年

八月二十八日 (第一次稿)



画像 6 : 146 「無題」 大正五年

八月二十八日 (第二次稿)